

むかし、あるところに、金持ちのお百姓ひやくしやうがいました。

ある日、お百姓は、田んぼの草取りに行きましたが、田んぼには水が一滴てきもなく、からでした。お百姓は、思わず、

「ああ、だれか田んぼに水を入れてくれないかなあ。もし入れてくれたら、ひとり娘むすめを嫁よめにやるんだけどなあ」といいました。

すると、若い男が来て、

「おれが水を入れてやるから、娘をくれ」といいました。

お百姓がびっくりしてるうちに、たちまち田んぼに水がいっぱいになりました。

お百姓は心配しながら家に帰りました。すると、娘が、

「おとうさん、そんな顔してどうしたの」と、ききました。

「じつはな、きょう、田んぼに水が一滴もなかったから、だれか水を入れてくれる者がいたら娘を嫁にやると思ったんだ。そしたら、見たこともない男が来て、水を入れてくれた。

じきにおまえをもらいに来ると思ったら、心配でなあ」

父親がそういと、娘は、

「それなら、わたし、お嫁にいきます。でも、祈年せねんまでは待ってもらってください」といいました。

その晩、男が娘をもらいにやってきました。父親が、

「祈年まで待ってくれ」というと、男は、

「わかった」といって、帰っていきました。

やがて、祈年の晩になりました。父親が、「豆を炒いつて、えびすさまにお供えていると、男が娘をもらいに来ました。娘は父親に、

「それでは、行ってまいります。一町目、一町目ごとに豆をまいていきますから、豆の花がさいたら、それをたよりにわたしを探しに来てください」といい残して、豆を持って出ていきました。

娘が嫁にいつて三年たったある日のこと、父親は、庭に豆の花がさいたのを見て、娘を

探しに行きました。一町目ごとに豆の花がさいていて、それをたどっていくと、山奥の大きな岩屋に着きました。その中に、娘と小さい男の子がいました。娘は父親を見ると喜んで、

「おとうさん、よく来てくださいました。この子はわたしの子どもです」といいました。

そして、「わたしの夫は鬼おにです。見つかったら、食べられてしまいます」といいました。そこへ、鬼が、大きい鹿しかをかついで帰ってきました。娘が鬼に、

「これは、わたしの父親です」というと、鬼は、にやつと笑っていました。

「うまそうな酒のさかながやってきたなあ」

つぎの日、鬼は狩りにでかけるとき、父親に、

「粟あわいっ一斗とまくだけの広さの畑をたがやしておけ。おれが帰ってきたとき終わっていないなかったら、おまえを食べてしまうぞ」といって、出ていきました。

父親が畑をたがやしていると、孫の男の子がおべんとうを持ってきて、

「じいちゃん、休んでいてちょうだい。おれがたがやすから」といって、あつというまに広い畑をたがやしてしまいました。

つぎの日、鬼は、

「きのうたがやした畑に粟をまいておけ」といって、狩りに出かけていきました。

父親が畑に出て、

(こんな広い畑にどうやって粟をまけばいいんだろう) と思っていると、男の子がおべんとうを持ってきて、

「じいちゃん、おれがまくから」といって、あつというまに粟をぜんぶまいてしまいました。

そのつぎの日、鬼は、

「きのうまいた粟をぜんぶひろい集めておけ」といって、出ていきました。

父親は、男の子に、

「いくらおまえでも、こんどはどうにもならんだろう。逃げることにしよう」といって、娘と三人、逃げるしたくをしました。男の子は、隠してあった祈年の炒り豆を持っていきました。

三人が山の中を逃げていくと、後ろから、鬼が追いかけてきました。男の子は、

「じいちゃんとかあさんは、先に行つて」というなり、ふりむいて、鬼に向かつて、

「鬼は外」と、炒り豆を投げつけました。すると、豆が鬼の角つのに当たつて、折れてしまいました。鬼は、力がなくなつて、いちもくさんに逃げていってしまいました。

男の子は、ふたりに追いつくと、

「おれは、村の氏神うじがみだ。おまえたちを助けてやりたいと思つて、子どもに生まれてきたんだ」といって、すつと消えてしまいました。

おしまい。

祈年……節分のこと。

村上郁 再話

資料 『大和民俗 復刊第二号』 「奥吉野昔話拾遺」